

12 リニューアルした衛生研究所

埼玉県衛生研究所は、今から60年前の昭和28年に現在のさいたま市に新設されました。その後、昭和47年に埼玉大学に近い、さいたま市の上大久保に移転しています。それから40年以上が経過し、建物も古くなり、耐震基準にも適応していないことから、廃校になった旧県立吉見高校の校舎を活用して、4月からリニューアルオープンしたのが現在の衛生研究所です。

平成22年度に新衛生研究所の基本設計を行い、平成23年度に詳細設計を完了しています。

そして、平成24年6月から10月にかけて、体育館などの旧吉見高校の一部建物を解体撤去しています。並行して同年の7月から高度研究棟の建設工事を開始し、同年11月には本館の改修工事に着手しました。平成25年7月には舗装や給排水などの外構工事を開始し、12月には建物の本体工事が終了し、クリスマスの25日に県営繕課・設備課から衛生研究所に引渡しとなりました。平成26年3月には植栽整備も終了し、4月から業務を開始しています。

衛生研究所が、本格的に移転作業を行ったのは、平成25年度になってからです。まず移転推進会議やプロジェクトチームを立ち上げて、役割分担を明確にして所全体で組織的に移転を推進する体制づくりを行いました。また業務継続計画を策定し、健康危機管理への対応を予め定めるとともに、業務がとぎれないように計画的な移転作業を行いました。そのため、実際の移転は平成26年1

月から3月までの間に、業務ごとに部分的に移転を進めることになりました。検査機器によっては、据え付け調整に時間のかかるものがあり、年明けから移設を開始しています。

また移転業務は、職員約80名の引っ越し、3千点にも及ぶ検査機器等の移設など、とても大がかりなものでした。

そこで、WTO 該当の一般競争入札により、委託業者を決定して、大規模で精密な検査機器を旧庁舎から搬出し、新庁舎へ搬入する作業などを効率よく進めました。

また新規購入備品も1千5百点以上になり、各担当ごとに短期間で購入手続きを進めてきました。

平成26年3月23日には、知事をはじめ、県議会議員、国会議員、地元吉見町長、県医師会長、地元自治会などが参加して、開所式・内覧会を盛大に開催し、新たな第一歩を踏み出すことになりました。

さて、移転による効果の一つ目ですが、吉見町に移転したことで、広域的な大災害時にさいたま市の「健康科学研究センター」と機能を補完することが可能となったことです。次に二つ目は、移転により埼玉県のほぼ中央に位置するようになり、県内各所からのアクセスが平準化され、効率的な検査体制とすることが出来ました。三つ目は、深谷支所を廃止し、本所1箇所へ統合、運営することで、より効率的な組織にすることが出来ました。

なお、さいたま市の市街地から、自然豊かな吉見町の水田地帯へと移転となり、立地環境が大きく変化しましたが、設計や建物設備に対応出来ない部分があり、運営しながら対処するなど反省点もあります。



次に、衛生研究所は、移転に伴い正確かつ迅速な検査を行うことを目指して、最新の検査機器を導入し、機能の強化を図っていますが、特に機能を強化した点を列挙しますと、以下のとおりとなります。

- ①精度管理体制の充実・・・試験・検査の信頼性確保、国際標準を見据えた業務管理の推進
- ②産学官連携の推進・・・大学、企業等との連携による新たな貢献活動の推進
- ③感染症情報センターの機能強化・・・分かりやすい情報提供、情報収集・発信機能向上
- ④細菌及びウイルスの遺伝子検査の強化・・・機器整備、早期感染源の特定、被害拡大防止
- ⑤微量化学分析検査の強化・・・機器整備、検査精度向上、危険ドラッグによる事故発生防止等
- ⑥開かれた衛生研究所の推進・・・身近な衛研、県民広報展示室、見学受入れ等の充実

結びとなりますが、これから職員一人一人が、県民の健康と安全な暮らしを支える衛生研究所の役割を多くの県民に理解いただけるように努め、またしっかりとその役割を果たしていくこと、積み重ねていくことが重要であると考えます。

移転後に年数を経て、改めて評価されるように毎日気を引き締めて業務に取り組んでいきたいと考えます。

この度、旧吉見高校跡地への移転計画が立ち上がり、移転終了まで衛生研究所の所長という責任ある立場で舵取りをし、衛生研究所を導いて来られました元所長の三氏に、衛生研究所の歩みと今後への期待をテーマに特別に寄稿をいただきました。

各氏が所長として、在任されました期間は以下のとおりとなります。

- 大村外志隆 平成4年～平成7年、平成18年、平成24年～平成25年
 - 丹野瑛喜子 平成13年～平成17年、平成23年
 - 伊能 睿 平成21年～平成22年
- (敬称略)

衛生研究所での勤務と今後への期待

大村外志隆

埼玉県衛生研究所が昭和28年4月に当時の大宮市吉敷町1丁目に開設され、その後さいたま市桜区上大久保の地に移転したのは昭和47年5月でした。私が最初に衛生研究所に勤務したのは平成4年4月でしたが、そのときの埼玉県長期構想の課題としては、食品の安全性の確保、医薬品の品質管理、衛生的な生活環境の確保の3点が挙げられていました。

その後の埼玉県における取り組みや関連事項としては、JICA/埼玉県ネパール・プライマリ・ヘルスケア・プロジェクトへの参加、インフルエンザ(A/H1N1, 2009)の発生・流行とその対応、病原性大腸菌による大規模な集団食中毒の発生、さらに、平成23年3月の東日本大震災とそれに引き続き東京電力福島第一原子力発電所の事故と放射能漏れによる環境中や食品中の放射能測定などは記憶に新しいところです。

さらに、私の3回目の勤務となりました平成24、25年度には浄水場におけるホルムアルデヒド汚染や、頻発するノロウイルスあるいは毒キノコによる食中毒事例、また、脱法ハーブなどから違法成分の検出などがあり、衛生研究所の果たす役割はますます重要となって来ました。

この度の衛生研究所の移転に関連し重要課題として掲げられた事項は、感染症情報センター機能の充実・強化、食の安全・安心対策の推進、検査業務の迅速化・精度管理の充実、また、危険ドラッグ検出機能の向上などでした。

吉見町への移転が完了し新たな衛生研究所がスタートしましたが、私が期待するのは、埼玉県民にとって誇れる衛生研究所であってほしいことです。そのためには、最新の機器の整備やそれらを使いこなせる人材の育成、それを担保する予算の確保などは必須ですが、それらとともに、より開かれた衛生研究所を実現して頂きたいのです。

私は平成26年3月末で埼玉県を定年退職し、4月からは介護老人保健施設で働いています。県職員であったとき、今と共通して大切にしている言葉は「人は力なり」です。これからの時代、予算も人も厳しいことは百も承知ですが、現役の皆さんの英知と努力に期待しています。

新衛生研究所に期待すること

丹野 瑛喜子

新衛生研究所は、移転計画開始から限られた予算・期間の中、職員の皆様をはじめ多くの方々のご努力により、安全で働きやすい施設として生まれ変わったことと喜んでいきます。

現在は、移転が終わり少しずつ職場環境にも慣れ、落ち着いてそれぞれの業務に励まれていることと思います。

私が最初に衛生研究所に赴任した2001年は、保健所検査室を統廃合し、組織も見直され職員数も増え仕事量並びに内容も変化した時でした。その後5年の間に、SARS、NBCテロ、白い粉（炭疽）など多くの健康危機管理事例への対応とともに皆で協力し、保健所支援も実施しました。更に、県としても公衆衛生の科学的・技術的中核機関の機能強化として感染症疫学情報担当組織の必要性を認め、平時からの情報共有の重要性を認識したところです。また埼玉県衛生研究所が当番の協議会等の開催には、多くの職員にご協力いただいたことを新たに感謝の気持ちで思い出しました。建物の老朽化への対応としては、雨漏りや壁の破損などに対し、サッシの設置や外壁塗装等を限られた予算の中、トップの判断で対応していただいたのも記憶に残っています。

2006年から2011年まで鴻巣並びに川口保健所に勤務しましたが、地域保健の第一線機関である保健所は、多くの職員は平時の業務に追われており、事件発生時に衛生研究所の助けを借りることができるのは、とてもありがたいと感じました。衛生研究所の役割は、正確で迅速な検査結果はもちろんのこと、常日頃からの情報の共有とともに新たな研究成果を研修などで伝え、保健所が地域の課題にいち早く対応できるよう支えていくことだと思っています。退職して仕事のことは忘れてしまいがちですが、時々関連のありそうな事例を見ると、対応大変だけど頑張ってくださいねと思っています。

衛生研究所が地理的には埼玉県の中心であるという吉見町に移転し、周囲の環境は少し静かになったのではないかと思います。現在の社会状況から見ても公衆衛生の課題は複雑になり、役割はますます重要になってきています。今後も衛生研究所のレベルアップを図るとともに、保健所を支援し県民の健康と安全を守り続けられるよう期待しています。

新しい酒

伊能 睿

新しい酒を古い革袋に入れておくと葡萄酒の発酵が進んで古い革袋は張り裂け、酒も革袋もだめになってしまう。新しい酒は新しい革袋に入れなければいけない。もともと新約聖書マタイ伝九章17節が原典だが、故事ことわざのひとつとしてすっかり身近な言葉になっている。同16節には、古い着物に新しい布切れでつぎ当てすると強度のバランスが崩れて、着物の破れがもっとひどくなってしまふとある。言い得て妙だ。

衛生研究所には十数年に亘って新しい酒が次々と仕込まれてきた。それは優れた人財（human resources）の涵養と最新の検査研究機器の導入という車の両輪ともにであり、自治体立の衛生研究所としては国内トップクラスの実績を積み重ねてきた。しかし、建物の老朽化に伴う停電、漏水のほか、壁面に生じた無数のクラックや窓の隙間からは暴風雨のたびに雨水が滴り落ち、これらが研究所の命ともいえる重要資料や精密機器に襲いかかることもしばしばであった。

今や廃墟となった旧衛生研究所は、2011年3月の東日本大震災に直面して、ガラス管ひとつ割ることなく守りきって最後の踏ん張りを見せてくれた。そのつぎはぎだらけの痛々しい姿を目の前にして、改めて深い感慨を感じる。このたび多くの方々の理解と協力を頂いて、無事にこの吉見の地に移転することができた。誰しもが安堵の胸を撫でおろしていると思う。

とまれ、新しい酒は新しい強靱な革袋の中に収められたのである。これを思う存分に発酵させ、馥郁たる香気を県民の健康のために広く漂わす役割を担うのは職員諸兄弟である。決して、新調の箒が良いのは三日間だけ、に終わらせてはならぬ。精進、奮闘を望む。